

地域協働授業の教員向け 運営マニュアル

目 次

| | |
|----------------------------|----|
| 1章 本マニュアルについて | 1 |
| 2章 地域協働授業の設計と実施 | 4 |
| 3章 地域協働授業の事例紹介 | |
| 1. 授業類型ごとの事例 | 12 |
| A 顕在的地域課題 × 提案型授業 | |
| B 顕在的地域課題 × 実行型授業 | |
| C 潜在的地域課題 × 提案型授業 | |
| D 潜在的地域課題 × 実行型授業 | |
| 2. 本事例における学生成長度評価 | 40 |
| 4章 ToolboxとT A活用のすすめ | 46 |
| 編集後記 | 61 |

1章 本マニュアルについて

▼本マニュアルを読んでほしい方の例

- 1、地域協働授業を新たに取り組まれる教員、もしくはあまり授業経験がない教員
- 2、学生の向上心に火を付けたいと考えている教員
- 3、地域とコラボレーションした研究活動や教育活動の推進をお考えの方
- 4、地域の自治体・企業・団体とのコミュニケーションにお困りの方

平成25年度に地(知)の拠点整備事業(COC事業)が本学で開始されてから4年間の経過し、様々なゼミで地域協働授業が実施されています。これらの授業の多くは、個々の教員が手探りで協働先との話し合いやコーディネーター、TAなどとの相談の上、授業を構築しています。これは通常の授業実施と比較して負担が大きく、現在は各教員の努力によって成立しています。上記のような負荷を軽減し、新たな教員の参画を促すために、本マニュアルは作成されました。

本マニュアルでは、今までの地域協働授業の実施状況を整理した上で、「**地域協働授業の基本要件**」を規定しました。

これは、すべての地域協働授業をこれに当てはめることを目的としているのではなく、あくまで、この定義に沿うことで授業の実施や計画づくりを容易にすることを目的としています。

地域協働授業の基本要件

本マニュアルでは、地域協働授業は以下の4つのキーワードを含むものとします。

① 仲間との協力

学生をグループ単位で活動させて運営する授業を行う。

② 地域との対話・協働

地域との対話を重視する。具体的には、一方的な調査・提案ではなく双方向で意見交換や課題の設定を行う。地域課題を的確に理解する。

③ 工学心を働かせる

技術者マインドを持ち、地域の課題に専門的知見、技術を役立たせることを常に心掛ける。

④ 学生の主体的な成長の場を設定し、評価する

学生成長度評価を活用し、学生の成長目標を明らかにするとともに、学生の主体的な授業プロセスを定量・定性的に評価して、学生の成長を促す。

地域協働授業をする上で、学生と地域に対する教員の心構え

地域協働授業とは、以下の三者がコミュニケーションを取りながら、地域の課題にお互いに協力しながら取り組み、地域課題を主体的に解決しようとする学生の育成をめざす授業です。

① 学 生

② 地域のステークホルダー

(地域住民、ボランティア団体、NPO 団体、農家・商店および自治体等)

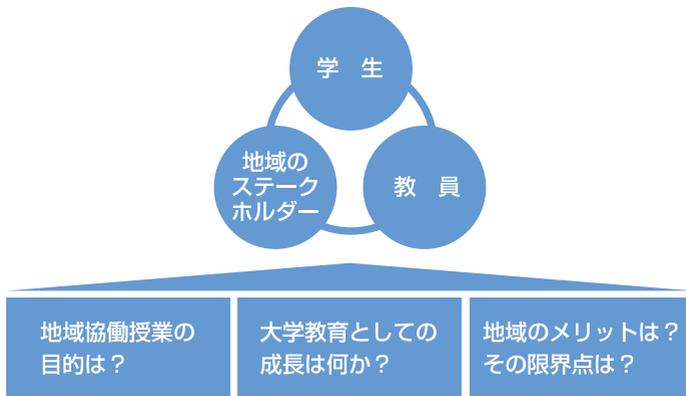
③ 教 員

上記三者がお互いに満足する関係を構築することが本授業の成功の早道であり、これらのバランスを調整することが教員にとって最も腐心する仕事となります。具体的には、学生および地域には、出来るだけ早い段階で以下の点を予め考えておき、できるだけ誠実に伝える必要があります。

A 「地域協働授業の目的」

B 「学生が本授業を通じて得られる大学教育としての成長は何か」

C 「地域にとってどんなメリットがあるか、そしてその限界点 (今回の授業内で実現できなさそうなこと)」



A 「地域協働授業の目的」

①学生 ②地域 ③教員 それぞれ三者三様の目的があります。まず教員は授業の目的を伝え、これらの意識を全員で一致させることが最も大事です。

B 「学生が本授業を通じて得られる大学教育としての成長は何か」

地域協働授業は、学生のモチベーションを高め、主体性を持たせることが何よりも大事になります。その主体性を持って、地域の方々の課題やニーズを汲み取り、教員は学生が取

り組むプロジェクトの支援をする必要があります。

学生の中には、授業初期段階に受け身な授業態度で参加しがちな学生もいますが、実際に地域のステークホルダーの話や取組みに直接触れることによって地域への関心が高まる場合が多くあります。本授業が学生の対人能力だけではなく、工学的専門能力の向上にどれだけ資するか説明し、共に行動することで彼らに実感させることが大切です。

C「地域にとってどんなメリットがあるか、そしてその限界点（今回の授業内で実現できなさそうなこと）」

地域協働授業は地域の協力があって成り立つものです。特に「教育の名の下に地域に協力を強制する」ことや、逆に「地域が学生を無償ボランティアとして使う」関係では長続きせず、避けたいところです。

地域の方々の中には、初めてコンタクトをとったタイミングでは非協力的である場合がありますが、学生の率直な意見や熱意を持ったアンケートやプレゼンテーションなどの行動によって、態度が軟化しコラボレーションが生まれる可能性も高まります。

また、「限界点」と書きましたが、「期待値の調整」と言い換える事ができます。同じ学生が関わることが可能な地域協働授業は最大でも半期15回であり、また専門的な研究室での取り組みではありませんので、そのことを地域の方々に最初にお知らせし、その中で最大の効果を模索する必要があります。

三者がお互いに満足する関係を構築することができれば、学生には地域貢献の意識と、実践的な工学心が芽生え、地域は長い視点で大学の教育研究に理解を示すパートナーとなってくれます。これらの信頼関係が教員の教育研究環境に好循環をもたらすことは間違いありません。

本マニュアルについては、後述の運営・事例の通り進めればよいというのではなく、あくまでも本書を手にとっていただいた教員のみなさまの地域協働授業の授業設計・運営の一つの指針として捉えていただければ幸いです。

特に地域協働授業は、学生、地域のステークホルダーなど人的属性によってプロジェクトの成果や運営が大きく異なります。事例や手法にとらわれず、プロジェクトメンバーと誠実に向き合い・声を聴くことを忘れずにプロジェクトの推進を後押しすることが、地域協働授業に携わる教員にとって最も肝に命じておくべき心構えとなります。

このマニュアルによって、地域協働授業がより一層広がりを見せ、本学が「工学心で地域と繋がる地域協働型大学」としてますます発展することに寄与できればと考えています。

2章 地域協働授業の設計と実施

1. 地域協働授業の授業設計について

1 対象地域、地域課題を決定するために COC コーディネーター、学科の COC 担当教員と相談する（授業開始1ヶ月以上前）。

※学期前に地域協働支援室より配信される「地域協働授業事前アンケート」を活用ください。

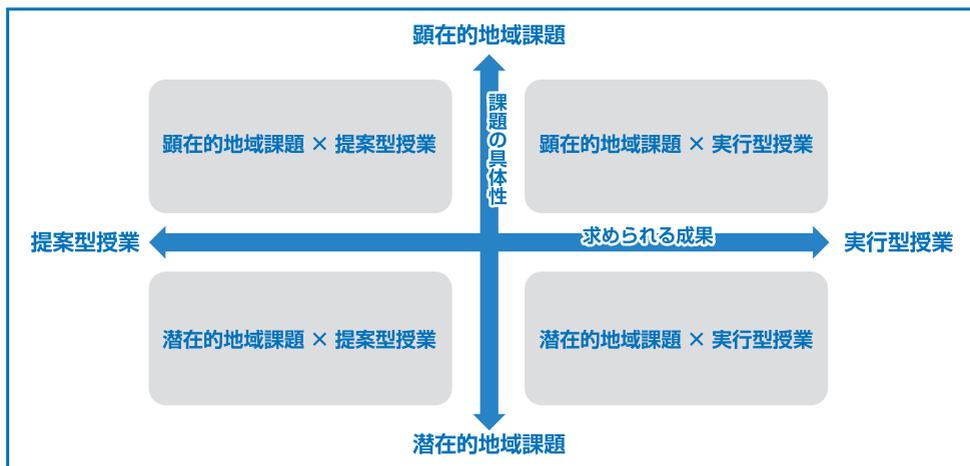
実際の地域課題を持つステークホルダーとコーディネーターを通して、もしくは直接打ち合わせを行い、その課題がどのようなタイプなのか、授業類型を考えて今回の授業のゴールを設定します。

<コーディネーターと相談するポイント>

- 地域の何の課題を知りたいのか、研究・貢献したのか？
- 地域協働授業を通じて学生にどんな経験をさせたいのか？
- 授業が終わった時に地域・学生がどんな状態になってほしいのか？

授業類型

授業を設計する際に、課題の具体性や求められる成果を考慮する必要があります。本マニュアルでは、「課題の具体性」「求められる成果」の2つの軸を設定し、授業を4つに類型しました。これは一例であり、各分野や教員に応じて以下のようなモデルを作成して、授業の目的を整理してください。



- **提案型授業**：調査・解決策を地域に提案する授業
- **実行型授業**：解決策を提案し、学生自ら実行する授業
- **顕在的地域課題**：地域の住民から相談されるような課題
- **潜在的地域課題**：学生自らが発見した地域の課題

例えば、「課題ははっきりしており、解決方法を考えるのが主」となるのか、「地域もはっきりとした課題が見えておらず、問題発見から必要」なのか、といったことを整理します。

2 学生成長度評価の基準を作る（授業開始 1 カ月前までに）

地域協働授業は課題設定によって授業プロセスや活動の成果物も異なり、画一的な学生の評価基準を定めにくい側面があります。そこで、授業開始前に地域協働授業で学生の伸ばしたい能力について地域課題の内容と重ね合わせて考えることが必要です。

例えば、プレゼンテーション能力や相手の話を聴く力など、地域協働授業で学生の成長を促す項目を評価項目として具体的に設定する、学生成長度評価シートを作成します。

学生成長度評価シート

- **地域課題力**：地域課題に対して「理解する力」、「挑戦する力」、「起案する力」を評価します。
- **仲間とのコミュニケーション力**：同じ課題に取り組む学生同士や教員、COCコーディネーターなどとの大学内での「伝える力」、「聴く力」、「問う力」について評価します。
- **対外的コミュニケーション力**：地域の関係者など大学以外の人に対する「伝える力」、「聴く力」、「問う力」を評価します。

上記3つの観点に対して、個別の能力について教員の方で「特に身に付けてほしい力」を1～3つを事前に選択（最大9つ）しておき、授業開始前に学生へ評価基準を伝えることで、学生に授業で期待する内容について明確になると考えています。

例として、【地域課題力】から「起案する力」、【仲間とのコミュニケーション力】から「伝える力」と「聴く力」、【対外的コミュニケーション】から「問う力」の計4つを選び、詳細を設定した場合は次頁のようになります。

| 選んだ評価項目 | | 設定した評価内容 | A 評価の教員基準 |
|----------------|-------|----------------------------|--------------------------|
| 大項目 | 中項目 | | |
| 地域課題力 | 起案する力 | このゼミにおいて何らかのアイデアを発想できたかどうか | 議題の過半数に対してアイデアを出すことができた |
| 仲間とのコミュニケーション力 | 伝える力 | ディスカッションで議論に参加できたか | 議論の過半数に対して自分の考えを発言できた |
| | 聴く力 | グループワーク等で他人の発言を聴くことができたか | 自分の意見に他人の意見を反映することができた |
| 対外的コミュニケーション力 | 問う力 | 地域の人に自分たちの仮説に基づいた質問ができたか | 質問する機会の過半数で仮説に基づいた質問ができた |

学生の評価については授業終了時のアンケート形式での回答だけでなく、1. 授業開始前からの自分の能力の変化を記入する、2. 教員と面談を通じて自己の変化について気付く、3. 教員や同じグループメンバーから成長に関するフィードバックを得る、等の機会を作ります。上記の対話の機会を通じて、学生自身では気づきにくい成長と自信を付けることにつながり、今後の学生自身の活動にも良い影響を与えられると考えています。

3 各週に対応した授業計画を作成する

地域協働授業の授業設計で設定した類型によって必要となる授業回数は異なります。問題の発見や解決が求められる場合は、その作業に多くの時間を割く必要があります。

ここでは、実際に一連のプロセスを次の「4つのフェーズ」に分けて、各フェーズに何週当てるのかを考え、授業計画を立てます。例えば、課題の発見が必要であれば、「理解する」フェーズに多くの時間を割くなど、類型に合わせた計画が必要です。

① **理解する**：地域の魅力 / 課題を発見・理解し自らの課題にする。

方法 自己学習、現場訪問、ヒアリング、フィールド調査 等

② **企画する**：自らの課題について、実施する策を「工学心」を働かせて考える。

方法 成功事例を調べる、アイデア出し、協働先との対話 等

③ **行動する**：企画したことを実行する。

方法 仲間・地域と協力・協働し提案する、試す、実行する、リトライする 等

④ **まとめる**：全体の学び・取組みをまとめ、振り返り、成果を地域へフィードバックする（学内外にも共有）。

方法 成果発表（協働先、または学内成果発表会に協働者を招く 等）

「理解する」「企画する」「行動する」「まとめる」の各フェーズについて、何回のゼミで実施するかを考えます。

実際の授業に関する計画や運営の中では、4つのフェーズの流れを順番通りに運営できるわけではなく、4つのフェーズを組み合わせ、繰り返しながら授業を行うことになる場合が多いです。例えば、「行動する」に関する授業を行った翌週に「理解する」に関する授業を行う場合もあるかもしれません。

3章の事例紹介の中では、実際のモデル授業で行ったフェーズの紹介もありますので、ご確認ください。

計画通りに授業が進捗しない場合もあるため、できるだけ柔軟に計画を変更できるように心懸けておきましょう。特に外部の組織との打ち合わせや、会合などのスケジュールは不確定な要因となりやすいため早めに計画しましょう。

15コマで割り振った例（テーマ：「プログラミングを学ぶ・教える（地域の中学生に教える）」）

| 回 | フェーズ | 内 容 | 学生の時間外課題 |
|----|------|---|------------------------------------|
| 1 | 理解する | ミッションを伝える／学生成長度評価（配布、説明、自己評価記入）／アイスブレイク | 「日本 / 地域におけるプログラミング教育の現状」について調べてくる |
| 2 | 理解する | 課題（宿題）の発表／協働先に聞きたいことをグループワークでリストアップ | |
| 3 | 理解する | 協働先にてヒアリング（個別に決まった質問+α） | ヒアリング結果をまとめる |
| 4 | 企画する | 振り返り（簡単に）／何を使ってどんなことを行うのかグループで検討 | 使用するプログラミングソフトを使いこなせるように練習する |
| 5 | 企画する | 試作（次回プレゼンできるようにする） | |
| 6 | 企画する | 協働先にてプレゼンを行い、アドバイスをいただく | |
| 7 | 行動する | プログラミング教室に向けた準備1 | |
| 8 | 行動する | プログラミング教室に向けた準備2 | 協働先との調整（訪問・メール・電話） |
| 9 | 行動する | プログラミング教室に向けた準備3 当日リハーサル1 | 協働先との調整（訪問・メール・電話） |
| 10 | 行動する | プログラミング教室に向けた準備4 当日リハーサル2 | 協働先との調整（訪問・メール・電話） |
| 11 | 行動する | プログラミング教室（当日）／参加者へアンケートを取る | 結果・感想などまとめておく |
| 12 | まとめる | 振り返り・成果発表会資料作成 | 成果発表会資料作成 |
| 13 | まとめる | 成果発表会練習 | 成果発表会資料修正・練習 |
| 14 | まとめる | 成果発表会 | |
| 15 | まとめる | 全体の振り返り、学生成長度評価（事後） | 教員：成長度評価を後日学生へ返却 |

次に90分間の授業の内容について考えてみます。90分間の時間の中でも、インプットとアウトプットを行う時間、また授業開始時にチェックイン*や授業終了後にチェックアウト*を行う時間を作ることで、学生が授業に対して主体的に、そして集中できる環境を作ること意識しましょう。

下記に、教室・学内など屋内での授業と、フィールドワークなど屋外での授業の時間配分を例に出します。毎回の授業内容に応じて、取り組む順序や時間配分は変わってきますが、授業の流れなどの参考としてください。

1 回授業（90 分間）のモデルケース

| 時間 | 教室・学内など | フィールドワークなど |
|-----|--|---|
| 0分 | 授業内容の確認 アイスブレイク*・チェックイン | 会場への移動、 授業内容の確認・チェックイン |
| 10分 | インプットとなる情報や宿題などの情報共有 | 現地の方より説明・ヒアリング (もし可能であれば現地の方とも一緒にアイスブレイクを行う) |
| 20分 | | |
| 30分 | 本題：講話・ディスカッションや調査・体験などの活動 | 質疑応答・提案活動 |
| 40分 | | |
| 50分 | | |
| 60分 | | |
| 70分 | 質疑応答（インタラクティブな時間） | |
| 80分 | 授業内容の振り返り・チェックアウト 宿題や外部との次のアポイントの準備 | 授業内容の振り返り・チェックアウト 宿題や外部との次のアポイントの準備 |
| 90分 | 授業終了 | 授業終了 |

*チェックイン：話し合いなどを始める際に、最初に今の自分の状態、気持ちを共有する時間。「今の気分」「今日知りたいこと」などを手短かに共有します。

*チェックアウト：話し合いなどを終わる際に、最後に自分の気づきや気持ちを共有する時間。「感じたこと」「学んだこと」などを手短かに共有します。

*アイスブレイク：緊張をときほぐすエクササイズ。コミュニケーションをとりやすい雰囲気を作る、参加者が積極的に場に参加してもらうために働きかける技術。

2. 地域協働授業の実施について

毎週の授業では、4章 Toolbox 集を参照し、適宜、シートやグループワークなどを取り入れて授業を行います。

以下、そのコツをいくつか紹介します。

1 主体性向上（モチベーションアップ）の工夫

一般的に学生は座学形式の講義に慣れており、「ゴールや目的は先生が決めるもの」、つまり「他人ごと」と思い込んでいることがあります。適宜授業中に「学生にやらせる・決めさせる（風にする）」ことで、自分たちが決めて実行するという「自分ごと」への変化を促すことができます。特に初期の「理解するフェーズ」で、「自分ごと」のスイッチを入れることは主体性を持って授業に取り組むために重要となります。

一例として以下のような方法がある。

- a. 期日を決め、学生（グループ）にミッションを振る
- b. 雰囲気作り：「授業」のイメージを引きずると「受身スイッチ」が入るので、プロジェクトを学生に任せている、というような位置付けにする
- c. 地域と「顔」が見える関係を早期に築く

2 TA*の活用

本学の地域協働授業においては、地域協働研究会 COCOS*のメンバーから構成される特別なTA(COCTA)を用意しています。授業の事前準備や当日のファシリテーション、グループワークの活性化、フィールドワークの監督などに活用できます。地域協働支援室を通じて、学期中であっても随時依頼することが可能ですので、積極的に活用されることをお勧めします。

※TA：教員とともに授業等のサポートを有償で行う学生。Teaching Assistant の略。

※COCOS：本学COC事業を推進するため平成26年4月に結成された学生団体。団体名COCOSはCOCのオペレーションシステム(OS)という意味の造語。COCTAとしての地域協働授業のサポートのみならず、独自に地域との様々な取り組みを日常的に行っている。

3 「課外」を有効に活用：支援室（アクティブラーニング協働スペース）活用

学生に授業時間外に活動をさせる場所として、アクティブラーニング協働スペースを利用することができます。アクティブラーニング協働スペースは、授業が入っていないならば自由に利用できます。19時までは使用可能であり、COCTAも夕方の時間は在中しているため、グループワークなどのサポートを依頼することも可能です。



場所：環境工学棟3階1-333室

4 グループワークなどの参考図書

地域協働支援室には、グループワークやコミュニケーションに関する書籍が多くありますので、適宜参考にしてください。



3章 地域協働授業の事例紹介

1. 授業類型ごとの事例

本章では、2016年4月～8月までに実際に本学で取り組んだ地域協働授業に関する4つの授業モデルを紹介します。

モデルとなる授業は本マニュアル制作に関わる教員2名で4つのグループに授業を割り振り、情報共有を行いながら15回分の地域協働授業を実施しました。本事例を通じて、「2章 地域協働授業の設計と実施」で紹介した4つの授業分類の具体的な授業の設計や運営のポイントを紹介します。

【地域課題のタイプと授業モデル】

A. 顕在的地域課題 × 提案型授業

→内川班「内川周辺の観光や住環境の実態調査」

B. 顕在的地域課題 × 実行型授業

→呉羽山班「呉羽自然体験におけるインストラクター養成のための視線検出システムの開発」

C. 潜在的地域課題 × 提案型授業

→南砺班「南砺市クリエイタープラザを核とした桜ヶ池エリアの活性化の企画立案」

D. 潜在的地域課題 × 実行型授業

→小杉班「小杉・新湊間の観光ルートの調査、アンケートによる観光動態調査」

上記4つの授業モデルはあくまでも授業運営の事例であり、地域協働授業の設計や実施に関する一助となれば幸いです。地域協働授業に取り組む際には地域課題や学生とのコミュニケーションのレベル等を考慮し、本事例の方法に囚われずに柔軟に対応してください。

顯在的地域課題

事例紹介1 内川班

A. 顯在的地域課題 × 提案型授業



事例紹介2 呉羽山班

B. 顯在的地域課題 × 実行型授業



提案型授業

実行型授業

事例紹介3 南砺班

C. 潜在的地域課題 × 提案型授業



事例紹介4 小杉班

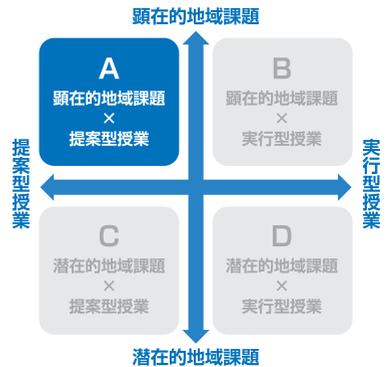
D. 潜在的地域課題 × 実行型授業



潜在的地域課題

事例紹介 1 内川班

地域協働モデル「A. 顕在的地域課題 × 提案型授業」



プロジェクト概要

テーマ：内川の地域課題について考える

具体的な取り組み：内川周辺の観光や住環境の実態調査

地域の課題：内川周辺が観光地として脚光を浴びつつも、人口減少・高齢化・空き家問題などが顕在化している

学生数：4名

地域協働地域プレーヤー：射水市港湾・観光課、NPO 法人水辺のまち新湊、射水市地域おこし隊、北陸ポートサービス株式会社、株式会社新湊観光船

コーディネーター：堺 勇人（地域協働支援室 COC コーディネーター）

教員：中田 崇行（情報システム工学科）

プロジェクト立ち上げの背景

昨今、映画の舞台にもなり観光地として脚光を浴びつつある射水市新湊地区内川は、一方で人口減少や空き家問題などが顕在化しています。本授業の指導教員が内川関係者となりがりがあり、事前にそのような実情を聞かされており、本授業を通じて取り組んでみようという話になったことがきっかけでした。

プロジェクトスケジュール

| 回数 | フェーズ | 授 業 内 容 |
|----|------|---|
| 1 | 理解する | (他グループ合同) 全体オリエンテーション グループ分け |
| 2 | | (他グループ合同) フィールドワーク 1：小杉方面散策 |
| 3 | | (他グループ合同) フィールドワーク 2：下条川遊覧＋内川周辺ガイドツアー |
| 4 | | ヒアリング 1：地元 NPO の講師をお招きして「内川の課題について」 聞く |
| 5 | 企画する | グループワーク 1：前回の振り返りと今後の方針についてディスカッション |
| 6 | | グループワーク 2：課題の報告会 |
| 7 | 行動する | ヒアリング 2：地域関係者へプレゼンテーション&対話 |
| 8 | 企画する | グループワーク 3：振り返り&全班中間発表会 |
| 9 | | グループワーク 4：住民アンケート案の具体案を練る |
| 10 | 理解する | ヒアリング 3：内川地区の若手社長と対話・意見交換 |
| 11 | 企画する | グループワーク 5：振り返りとアンケート作成 |
| 12 | 行動する | アンケート作成、提案内容を議論 協働相手にお越し頂き、アンケートの素案の議論 |
| 13 | | グループワーク 6：アンケート作成 |
| 14 | まとめる | (他グループ合同) 成果発表会 |
| 15 | | (他グループ合同) 全体の振り返り、感想の共有、学生成長度評価 |

1) 地域からの反応

最終的に地域との調整が間に合わず、授業内でアンケートを実施するには至らなかったが、今回の取り組みを通じて内川を知らなかった若者（学生）が内川に興味を持ってもらえるようになったことについて、地域関係者からはとても歓迎されました。



地元 NPO の講師をお招きして「内川の課題について」聞く



地元若手社長と対話・意見交換

2) 学生の変化

内川班の授業に出席した学生 4 人の内、富山県内出身者は 1 名しかおらず、かつ全員が今回のフィールド「内川」を訪れたこともなければ、存在さえ知らない状態からのスタートでした。しかし、複数回の現地訪問、そして地域関係者との対話を通じて次第に思い入れを抱くようになり、後半のアンケート作成においては、一人一人が「自分ごと」として内容を吟味するまでに至りました。

前述の通り、授業内ではアンケート実施まで辿り着けませんでした。授業後に行われた本地区での曳山祭りには、観光客誘導のボランティアとして当学生 2 名が自主参加してくれました（右写真）。今回の取り組みによって少なくとも学生達は「地域の魅力」を感じてくれたのだと思います。

当初は、少々おとなしく感じていた学生達でしたが、グループワークや地域関係者との対話を重ねるにつれて、学生同士や地域の関係者に対しても自分



ゼミ後に曳山祭りのボランティアへ 2 名が自主参加した。

の意見を述べる、積極的に質問する、人の意見を取り入れる、積極的にコミュニケーションを取れるなどの成長を遂げました。授業最終日の全体振り返りの際に、学生からは「今回の授業を通じて、人としての“総合力”のようなものを養えた気がします」という感想を、異口同音に述べたことが象徴的でした。

3) 大学として得た知見・役立った専門性

本取り組みによって、一定の地域関係者と複数回やりとりをさせていただいたことで、関係性が密になり、地域との連携・協働が行いやすくなりました。今回のような一度できた地域との関係性を一つ一つ大切にしていけることが、地域協働型大学の基盤作りに重要だと感じました。

授業内でのアンケート実施に至らなかったことはスケジュール作りについて改善が必要ですが、アンケート作成における設問作り・情報収集の方法・分析等に関する取り組みについては、学生の専門性が活かせる点であったと感じました。

本プロジェクトから紹介するノウハウ

1) フィールドワークを時間外の課題(宿題)にする

通常、授業時間内にフィールドワークを行います。が、学生が現地をよりよく知るには十分な時間が確保できない場合もあるため、極端に遠い場所、危険な場所、煩雑な調整が発生する場所などでなければ、学生に課題として空き時間等に個別にフィールドワークを行うことも有効です。

| | |
|--------|---|
| 授業体系 | 個別 or グループ |
| 準備するモノ | なし |
| 所要時間 | 休日等、学生の空き時間 |
| 手順 | <p>行ってもらいたい場所・収集して欲しい情報・報告形式を指示する。</p> <p>例) 今回実際に行った内容</p> <ul style="list-style-type: none">● 個別に内川に行ってもらい、後日「私の好きな内川」というタイトルで発表してもらった。● 報告形式：ブログやSNSのような写真ベースのレポート(スライド資料)：現地を感じることに重点を置いてもらった。 |



時間外に課題を与える状況としては、一度授業でフィールドワークを行った後で、学生一人一人の地域に関する興味・関心を深めたい場合や、地域の実態を学生一人一人がより理解してほしい場合などに個別のフィールドワークは有効だと考えています。今回実際に個別課題を実施することで、学生一人一人が具体的なエピソードを自分の言葉でそれぞれの想いを抱いて話ができる状態にまで至りました。

また、それぞれの学生が実に多様な目線で現地を訪問することで、団体のフィールドワークを行うだけでは気づき得なかった内容を拾えることや、幅広い現地での情報収集、また学生同士が互いの持つ多様な視点に気付く機会としても有効であったと感じました。

2) 地域との関係作り(学生のプレゼンテーションを地域関係者に聞いてもらう)

地域の魅力向上に関しては、「若者の感覚を知りたい・取り入れたい」という地域の方の声をよくいただくことがあります。そのような場合に、学生個々の率直な意見についてプレゼンテーションを行う場を地域関係者の前で設けます。地域からの要望である学生(若者)の率直な視点を地域の方々へ伝えることができると同時に、その発表をきっかけに、「あの場所はこうなっているのだよ」や「昔はこうだったよ」などといった地域の方々からの反応もいただけるため、ヒアリングや対話のきっかけにもなります。

| | |
|--------|---|
| 授業体系 | 学生：個別 or グループ 地域関係者：2～10名ぐらい |
| 準備するモノ | 発表スライド |
| 所要時間 | 60分～90分 |
| 手順 | ①あいさつと概要説明（担当教員から） ②各学生の発表（3分） ③地域関係者からのコメント（意見交換）（5分※） ④繰り返し ※地域の人からの話が盛り上がり、時間が押す場合もあるため、時間管理を怠らない。 |



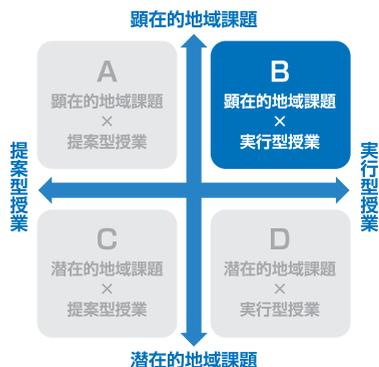
今回の学生の発表内容については、地域の「第一印象」を重視し、若者がその地域を感覚的にどのように捉えるかについて伝えることを目的として行いました。注意点としては、あくまで学生は1, 2度訪問したのみの感想であるため、ぶっつけ本番で学生に発表させるのではなく、内容や表現に不適切なものがないか指導教員と共に事前確認を行っておくことです。



今回、学生に主体性を持たせるための工夫として、授業というよりもサークルなどの主体的な団体に属しているような感覚を学生に持たせることを重視しました。「授業」と聞くと、どうしても「受け身」のスイッチが入ってしまう学生が多いため、「内川を知り、何かやっ払いこう！」という4ヶ月間のプロジェクトに属してもらっている設定で、授業運営を行いました。4人編成のため、グループワークが常に基本となり、「次はどうしていこうか？」など何をするにしても話し合うことを前提としました。学生が、「今後の展開は自分たちが司っている」という感覚を持つことで、自ずと主体性が現れてきます。しかしながら、授業には15回という時間的制限があるため、到達したい目標まで授業内に辿り着けるように、事前の大まかな設計は教員で行っておくことが必要だと感じました。



地域協働モデル「B. 顕在的地域課題 × 実行型授業」



プロジェクト概要

テーマ：視線検出システムの開発

具体的な取り組み：呉羽自然体験におけるインストラクター養成のための視線検出システムの開発

地域の課題：ガイド指導者の育成

地域協働地域プレイヤー：NPO 法人きんたろう倶楽部

学生数：5名

技術 TA：4名

COCTA：1名

教員：中田 崇行（情報システム工学科）

本プロジェクトは比較的高い画像処理プログラミング技術が必要としたため、通常の COCTA のほかに、上記の技術に精通した学生を技術 TA として組織し、学生たちの指導を行いました。

プロジェクト立ち上げの背景

富山県立大学から車で10分ほどの距離にある呉羽丘陵は富山県の中心に位置し、県を東西に分割することから「呉東、呉西」の語源にもなっています。呉羽というエリアは、富山駅から市電一本の距離にあるアクセスの良さにありながら豊かな自然を有しており、特に子供を中心とした市民に対する自然教育への活用が期待されています。NPO 法人きんたろう倶楽部は自然を活用した各種活動を行っており、自然体験学習として、子ど

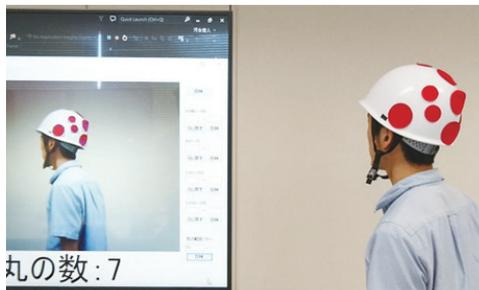
もが観察・調査・見学・飼育・勤労・奉仕などの体験的活動を通して自らの感覚機能を使って自然に直接働きかけ、そこから事実や法則を習得する学習方法の実践を行っている地域の団体です。

今回きんたろう倶楽部より、指導者の育成においてガイドに関する技能習得を手助けするツールとして、受講者の注目度を計測する視線検出ツールを作成したいというニーズをいただきました。情報システム工学科の専門技術を生かした地域貢献を行うことを目的に、本プロジェクトが立ち上げられました。

視線検出システムとは

カメラを使用した画像処理システムです。視線を検出したい対象（子供等）にヘルメットを被ってもらい、これらをカメラで撮影します。

ヘルメットには特殊なパターンの模様が描いてあり、これらを画像処理することで、子供たちがインストラクターに注意を向けているのか、もしくは飽きて他の方向を見ているのか、数値的に把握できるシステムの完成を目指します。



視線検出システムの稼働の様子



視線検出ヘルメットをかぶった子供たち

プロジェクトスケジュール

| 回数 | フェーズ | 授 業 内 容 |
|----|------|---|
| 1 | 理解する | (他グループ合同) 全体オリエンテーション グループ分け |
| 2 | | 視線検出システムについての講話 |
| 3 | | (他グループ合同) クリエイタープラザ訪問 |
| 4 | | きんたろう倶楽部へのヒアリング アプリケーションの技術トピックの学習 |
| 5 | | 呉羽山のフィールドワーク 写真と動画を撮影 |
| 6 | 企画する | フィールドワークの振り返り 動画を見て視線の取り方についてディスカッション |
| 7 | 行動する | プログラム技術講習 1 OpenCV のハンズオン、設計、ディスカッション (プレゼンテーションと宿題) |
| 8 | | プログラム技術講習 2 OpenCV 導入ハンズオン、カラー抽出とラベリング、システムのブラッシュアップ |
| 9 | | プログラム技術講習 3 合宿前開発物システム設計と買い出し |
| 10 | | 1泊2日の開発合宿を実施 きんたろう倶楽部の関係者に試作品をプレゼンテーション |
| 11 | 企画する | 合宿振り返り 開発 1 |
| 12 | 行動する | 開発 2 |
| 13 | まとめる | 開発 3 全体報告会発表準備 |
| 14 | | (他グループ合同) 成果発表会 |
| 15 | | (他グループ合同) 開発 4 |

プロジェクト実施内容

■ 導入、概要説明(1、2回目)

グループ分け、プロジェクトの目的、概要説明を行いました。

■ 視察(3回目)ー南砺班と合同

この班はプログラムを作成することを第一目標とするため、クリエイター現場の視察も必要との判断に基づき、南砺班と合同で行いました。

■ 現場の方のお話、現場の視察等の情報収集(4～6回目)

さんたろう倶楽部の関係者からの講義、環境教育の実情、富山の森の現状に関する知識についてのヒアリングを行いました。また、簡単な画像処理プログラミングのチュートリアルを行い、現状の問題と技術との接点を考えさせる動機付けも併せて行いました。その後、呉羽丘陵の見学を行うため、「富山の自然、自然教育の実態」および「屋外画像認識の実態」の現場確認を行うことを狙いとしました。



さんたろう倶楽部関係者からのお話の様子

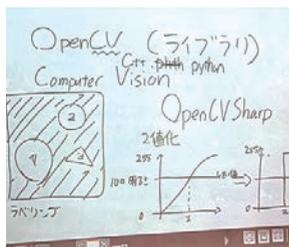


呉羽丘陵実地見学と屋外での色の見え方の調査

■ プログラム技術講習(7～9回目)

情報システム工学科の学生は基本的なプログラムの知識はあるものの、画像処理についての知識に欠けるため、これらの基礎学習から開始しました。

座学も行いますが、必ず「ここまでで学んだ知識で、どのように視線検出が行えるか」を講義の最後に入れて、学生に考えさせました。同時に、画像処理の対象ハードウェアの設計も行わせました。



視線検出帽子の設計画面



ハンズオンでの技術講習



視線検出ハードウェア材料の買い出し

■ 開発合宿(10回目)

開発にはどうしてもまとまった時間が必要なため、きんたろう倶楽部関係者との問題共有やシステムの評価版の作成を目的として、呉羽丘陵の呉羽山荘においてハッカソン※合宿を行いました。

合宿中に2回、作成したシステムを関係者全員に見せながらの全体レビューを行いました。1回目は作成したシステムに対して学生達ときんたろう倶楽部関係者で目的の乖離が見られましたが、学生は翌日のレビューまでの短時間にこれらの目的の乖離や技術的な問題を自主的に修正したことが印象的で、ハッカソン学習の効果を感じました。



開発の様子



第1回レビューの様子



第2回レビューの様子

合宿の流れ

7月2日(土)

| | |
|-------------|---------------------|
| 11:30 | 学校を出発 |
| 13:00～20:00 | ミーティング・開発作業(食事休憩含む) |
| 20:00～21:00 | 1回目のレビュー |

7月3日(日)

| | |
|-------------|------------------|
| 9:00～12:00 | 開発作業 |
| 12:00～13:00 | 2回目のレビュー／今後の方針決め |
| 13:30 | 学校で解散 |

■ 開発(11～13回目,15回目)

ハッカソンにおいて関係者との問題意識のズレや、必要と考えられる技術が学生達の中で理解できたので、技術TAと相談しつつ、目標を達成するための開発を適宜行いました。



システム開発に取り組む様子

※ハッカソン：集中的にプログラミングやコーディングを行うイベント

1) 地域からの反応

当初、きんたろう倶楽部関係者は「子供たちの視線が分かるとう便利だね」という程度の漠然としたニーズを持っていましたが、技術的なイメージがないため具体的なシステムが見えて初めて「そこは違う…」という感想を持ち始めました。研究室における企業との共同研究開発においてよく見られる反応で、そのため評価版システムのレビューを講義中間に挟んでいます。「頑張っているね」という意見しか出ないうちは、地域にとってお客様状態です。否定的な意見が出始めてやっと地域貢献の始まりであると感じています。

今回は、具体的なシステム提案とプログラムデモが授業の途中で行えたため、きんたろう倶楽部の詳細なニーズやシステムの不満点を確認し、それに応じた修正ポイントを提案することができました。それにより、授業参加学生への信頼、本プロジェクトそのものの信頼と期待が大きい旨の評価を頂きました。

ただ、15 回分の授業でプロジェクトを完結させることは現実的には厳しいものであり、最終的な評価は今後の取り組み次第であります。

2) 学生の変化

当初のプロジェクトの背景を説明する回までは、学生のモチベーションは通常の座学の姿勢とあまり変わらず、モチベーションの立ち上げ効果を期待して実施した第5回の呉羽丘陵フィールドワークも思ったほど盛り上がりませんでした。しかし、プログラムの技術講習やヘルメットの具体的な開発が始まると次第にモチベーションが上がり、10 回目のハッカソン合宿で学生のモチベーションは大きく高まりました。結果、その後の開発作業はかなり自主的なものとなり、教員としての運営の主な役割は彼らのやる気をサポートすることになりました。

基本的にはあまり人前で発表する機会のない学生が多かったように感じましたが、技術的な裏付けの元、他人との意見を積極的に交換する機会や、外部の方と問題点を共有し、解決策をプレゼンする機会を多く持った結果、これらの点について授業開始前よりも成長を感じると自己評価した学生が多かったです。

学生の指導で気をつけること

学生のモチベーションをいかに立ち上げるかが重要なポイントであり、どれだけ早く学生を「講義を受けるお客様」意識から「プロジェクトの当事者」意識に変えるということが大切でした。そのため、指導する程度の制御には気を使いました。教えすぎると当事者意識を持たず、放任しすぎるとプロジェクトが進まずモチベーションが下がるため、バランスの調整に気を遣いました。

本プロジェクトから紹介するノウハウ

本プロジェクトは他の班と違い、技術 TA が多数存在しました。

毎週月曜日に他グループの運営メンバーと全体のミーティングを行い、加えて、それを受けて水曜日に技術 TA の打ち合わせを行い、最終的な講義の内容とそれぞれのスタッフの動き・利用するプログラムや道具の準備を行うなど、他グループ以上に事前の打ち合わせが必要でした。

関係者が専門的技術を身に付ける講義を盛り込む際には、パートナーシップやマネジメントにも注力する必要があります。



コ ラ ム

本授業では、学生を組織して、技術教育を行い、モチベーションを高め、なおかつクライアントの要求に応えるシステムを作成することを目的としました。地域との共同研究に近いですが、従来の共同研究に関わる学生は基礎研究力があることが前提となるため、それよりも手間がかかります。そのため、これらの技術教育を補佐してくれる技術 TA の役割は大変重要でした。技術 TA は学生の求めに応じて技術の教育は行いますが、システムを設計して実際にメインプレイヤーとして動くのは学生です。教育バランスの調整は教員にとっても難易度の高いスキルであり、自らも学生である技術 TA 陣にこれらの高い教育スキルを求めることは少々酷とも思いましたが、彼らはその要求にかなりの水準で応えてくれました。

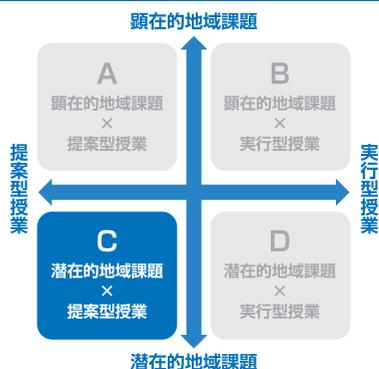
本プロジェクトは、上記の背景より手間がかかり大変ではありましたが、学生は上記に述べたように大きく成長し、TA 陣は教育スキルが大きく向上し、教員自身はプロジェクト管理能力が身に付く大変有意義な機会であったため、挑戦するだけの価値はあったと感じています。

また、本授業では合宿にモチベーションの山が来るように設計を行っています。今回その目論見は上手く働き、合宿以降の授業は学生の自主性にある程度任せることで運営できました。

その意味では、合宿の開発、関係者とのレビュー会がかなりの効果を発揮したため、前半部分の講義を少し短縮し、もっと早い時期に合宿を設定すればよかったと思う一方で、システム開発のための座学は一定期間必ず必要な過程であり、どれだけ座学の時間を圧縮できるかは今後の検討課題です。

他の方法としては、合宿を複数回設定し、前期合宿は技術指導、後期合宿は本格開発またはレビュー会とするという選択肢も有効かもしれません。開発作業はまとまった時間を必要とするため、同じコマ数でも複数コマをつなげて集中講義形式にするのもタイムマネジメントとして効果的と考えています。

地域協働モデル「C. 潜在的地域課題 × 提案型授業」



プロジェクト概要

テーマ：南砺市を盛り上げよう

具体的な取り組み：南砺市クリエイタープラザを核とした桜ヶ池エリアの活性化の企画立案

地域の課題：南砺市クリエイタープラザの一般市民への認知度が低い

地域協働地域プレーヤー：一般社団法人 PARUS、南砺市役所ブランド戦略部商工課、南砺市クリエイタープラザ入居者

学生数：4名

COCTA：1名

コーディネーター：松本 八治（民間ファシリテーター）

教員：岩本 健嗣（情報システム工学科）

プロジェクト立ち上げの背景

南砺市の新しい公共施設として“南砺市クリエイタープラザ（愛称：桜クリエ）”というクリエイター向けのサテライトオフィス兼コワーキングスペースが平成28年4月にオープンしました。南砺市としては新たな地域の産業創出・文化発信の施設として期待していますが、施設としての市民への認知度が低いという課題があり、本学生を交えて地域への認知度をどのように高めていくかということプロジェクトの課題に据えて、南砺市での関係者へのインタビュー、フィールドワークを踏まえた企画立案、関係者へのプレゼンテーションを行いました。

プロジェクトスケジュール

| 回数 | フェーズ | 授 業 内 容 |
|----|------|--|
| 1 | 理解する | (他グループ合同) 全体オリエンテーション グループ分け |
| 2 | | コーディネーターからのインプットセミナー |
| 3 | | (他グループ合同) クリエータープラザ訪問 関係者への質疑応答 |
| 4 | 企画する | クリエータープラザ往訪の振り返り アイデア出しと提案ネタの選択 |
| 5 | | 取り組むアイデアに関するの調査（宿題）と結果の共有 提案ネタの確定と往訪日のアポ取り |
| 6 | 行動する | クリエータープラザ関係者への第1回目プレゼンテーション |
| 7 | 理解する | (他グループ合同) 株式会社まちづくりとやまを視察 |
| 8 | 企画する | 第1回プレゼンテーションとまちづくりとやまの視察の振り返り 第2回目のプレゼンテーション内容を検討する |
| 9 | | 第2回プレゼンテーションに向けた具体的なアイデア prest |
| 10 | | 第2回プレゼンテーション 企画書作成 |
| 11 | 行動する | クリエータープラザのフィールドワーク・関係者への事前協議 |
| 12 | 企画する | プレゼンテーション資料ブラッシュアップ・プレゼンテーション演習 |
| 13 | まとめる | クリエータープラザ関係者への第2回プレゼンテーション |
| 14 | | (他グループ合同) 成果発表会 |
| 15 | | (他グループ合同) 全体の振り返り、感想の共有、学生成長度評価 |

1) 地域からの反応

今回の授業では、活動の範囲がインタビューやフィールドワークに留まり、最終的にはプレゼンテーションまでの提案活動となりましたが、“近隣地域施設との連携”というアイデアは地域の方からも歓迎され、地域外のプレイヤーとして当事者だけでは気づきにくかったアイデア・視点を提供することができました。

また、地域のステークホルダーにインタビューをすることを通じて、普段意見交換を行わない地域の人同士をつなげる機会を結果として提供することができました。

2) 学生の変化

授業当初は自分の意見を出すことに控えめで、自分の殻に閉じこもっている印象を受けていました。また最初のプレゼンテーションでは、学生たちから”とりあえずできそうなアイデア”という妥協案で提案を行ってみたところ、地域の方にとって響くアイデアにならず悔しい思いを経験しました。その経験から学生たちはその後、真剣にフィールドワークや企画立案に取り組み、世間一般的なアプローチではなく、「自分たちが好きなこと・できる」ことから再提案しようと考えました。議論を深めていくにつれて自信を付けていったように感じました。

プレゼンテーション演習やアイデアを自分の言葉で話す機会を通じて、自分のアイデアに対する矛盾が少なくなり、「地域のエリア連携」という地元で解決できていない課題に対するアイデアのコンセプトを導き出し、地域の方から共感していただくまで成長できました。まだまだ具体性に欠ける部分はありましたが、授業当初に比べて主体性や自身の考えに自信を持つ部分で大きな成長を感じました。

3) 大学として得た知見・役立った専門性

今回の地域協働授業ではクリエイタープラザの施設の運営者だけでなく、施設入居者や運営元の市役所職員など複数の関係者にアプローチすることで施設運営の実情に触れることができました。また第2回プレゼンテーション後には、今回の企画を発展していけるように今後も情報交換やクリエイタープラザの考える企画に対して学生も一緒にコラボレーションできませんかとお声掛けいただき、新たな関係作りにつながりました。残念ながら、学科の専門知識を活かした取り組みはあまり行えませんでした。今後の研究室や社会人になった後も幅広く活用する場面のあるプレゼンテーションの基礎について実践で学ぶ機会になったと考えています。

1) アイデアブレスト

企画・提案を考える際に、グループで様々な意見・アイデアを出し合うことをよくあります。今回は、学生とコーディネーターで行ったグループワークでのブレインストーミング方法をご紹介します。

| | |
|--------|---|
| 授業体系 | グループ (2~4名) |
| 準備するモノ | ホワイトボード (模造紙)、油性マジック、付箋 |
| 所要時間 | 50~60 分間程度 |
| 手順 | <p>1. アイスブレイク (5~10分)</p> <p>本題の議論に入る前に誰でも話せる内容や、身体を動かすことで緊張をほぐしましょう。</p> <p>例1) Good&New：24時間内に起こった嬉しかったこと・新しい発見をグループで発表する。</p> <p>例2) 後出しじゃんけん：ファシリテーターがじゃんけんの親となり、他のグループメンバーは後出しじゃんけんを行う。ファシリテーターに対して、「あいこ」「勝つ」「負ける」などのルールを決める。ファシリテーターの『ジャンケン ポン』の声に併せて『ボン』と大きな声で言いながらジャンケンを行う。※4章 Toolbox を参照</p> <p>2. アイデアの発散 (全体で 10~25分)</p> <p>課題に対するアイデア・意見、気になることを付箋に書き出す。(5分~10分)</p> <p>時間のあるときは、書き出したアイデアをホワイトボードに貼り出し、全体の意見を一覽させる。時間がないときは、各自優先順位の高い意見から順番に発言してもらおう。</p> <p>発散時は、書き出した意見の深堀りや他のアイデアとの関連付けをメインに自由な意見交換を行う。(10~15分)</p> <p>3. アイデアの選択・収束 (10~20分)</p> <p>出てきたアイデアについては、グルーピングや優先順位付け、地域協働授業における制約条件などを踏まえてアイデアを選択していく。</p> |

4. 次へのアクションプラン作成・アポ取りと役割分担 (5~10分)

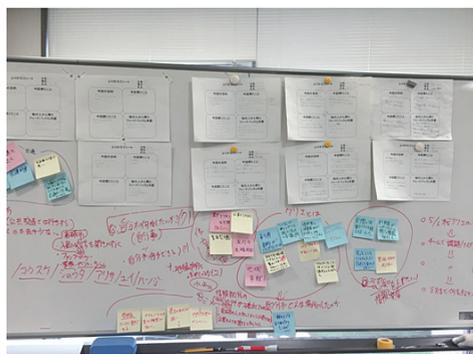
次回検討・実行するアイデアが出てきたら、具体的な行動や地域の関係者へのアポ取りの計画を作成する。計画では5W1Hを意識して、漏れがないように意識する。もしアポイントが取れなかった場合のバックアップの対応も検討しておく。初めてのミーティングの場合は、ミーティング後の連絡方法も確認しておく。

アイデアブレスト(ブレインストーミング)は学生のみだけでなく、地域のステークホルダーとの意見交換の場として行うこともあります。特に大事なことは、教員および会議を運営する人(ファシリテーター)が互いの意見を尊重するような会議の運営ルール作りや雰囲気作りに配慮することであり、会議のアウトプットを高めるためには必要不可欠です。事前準備として、学生に対しては地域のステークホルダーの取り組みを前もって調べるようにアナウンスを行い、地域の方々に対しては地域協働授業や訪問の目的などを事前に連絡しておきましょう。また会議運営については、「相手の意見を非難しない」「自由な意見を歓迎する」「アイデアの質よりも量を重視する」「時間は守る」などの会議運営のグランドルールを事前に会議前にアナウンスすることで、安心してアイデアや意見を出せるという雰囲気を作っておくことが大切です。

上記の手順通りに行う必要はありませんので、できることから取り組んでみてください。



フィールドワークの様子



アイデアブレスト時のホワイトボード



初回のインプットセミナーで工夫した点としては、自己紹介のワークを取り入れ、学生に対して問いかけを多く行いました。理由としては、学生のキャラクターを掴むことと、自己紹介の大切さ（地域のステークホルダーに対して簡略に学生自身のことを伝える必要性）を体感してもらうためです。地域へのフィールドワークは合計4回行いました。

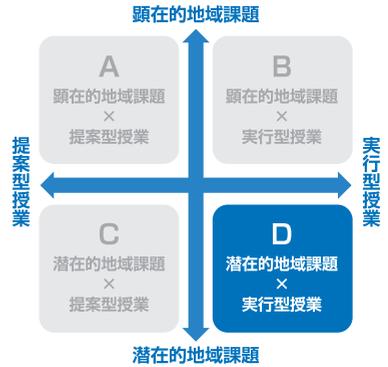


クリエイタープラザでのプレゼンテーションの様子

回を重ねるごとに学生の成長を感じることができました。特に、最終回の授業で「こんなに自分の意見を言った経験は初めてでした」という学生のコメントを多くいただき、学生が自分の意見を発言することで自分自身に対する自信を得たことに繋がったと感じました。また、学生を指導される方にお伝えしたいことは、自己紹介やフィールドワークの振り返りなどについてはある程度コツやタイミングも重要です。4章 Toolbox も活用しながら学生の状態の変化についてモニタリングすることで、より学生に対して適切な助言もしやすくなると考えています。学生のみなさんには、今回の地域協働授業での経験を今後の自己の研究や就職活動でも活かして欲しいです。

事例紹介4 小杉班

地域協働モデル「D. 潜在的地域課題 × 実行型授業」



プロジェクト概要

テーマ：観光における小杉地区と新湊地区の連携を考える
具体的な取り組み：小杉・新湊間の観光ルートの調査、アンケートによる観光動態調査
地域の課題：小杉周辺と新湊周辺の観光が分断されてしまっている
学生数：4名
地域協働地域プレイヤー：射水市港湾・観光課
COCTA：1名
教員：岩本 健嗣（情報システム工学科）

プロジェクト立ち上げの背景

射水市は観光の中心となっている新湊地域と、小杉駅周辺の観光資源の接続性の低さが課題となっています。

射水市港湾・観光課から、この問題の解決について大学に相談を受けていたため本授業のテーマとしました。また、情報システムの分野では、近年、観光動態をデータで調査・分析する手法が広まりつつあるため、専門の分野からもデータを活用した観光振興について学ぶための機会としました。

プロジェクトスケジュール

| 回数 | フェーズ | 授 業 内 容 |
|----|------|--|
| 1 | 理解する | (他グループ合同) 全体オリエンテーション グループ分け |
| 2 | | (他グループ合同) 小杉駅周辺のフィールドワーク 1 |
| 3 | | (他グループ合同) 下条川遊覧と内川周辺ガイドツアー |
| 4 | 企画する | RESAS*のチュートリアル説明 |
| 5 | | RESAS のデータを活用したディスカッション 1・レポート作成 |
| 6 | 行動する | RESAS のデータを活用したディスカッション 2 射水市役所職員に「RESAS から読み取れる射水市の現状」というレポートをプレゼンテーション |
| 7 | 理解する | (他グループ合同) 株式会社まちづくりとやまを視察 |
| 8 | まとめる | RESAS のプレゼンテーションの振り返り 今後射水市への提案についてディスカッション |
| 9 | 理解する | 小杉駅周辺のフィールドワーク 2 |
| 10 | | 小杉駅周辺のフィールドワーク 3 |
| 11 | 企画する | 小杉駅周辺のフィールドワークの振り返り・大門・新湊周辺のフィールドワーク フィールドワークを踏まえた射水市役所への提案・アンケート内容について ディスカッション |
| 12 | 行動する | 提案内容のブラッシュアップ |
| 13 | まとめる | 成果発表会の準備 |
| 14 | | (他グループ合同) 成果発表 |
| 15 | | (他グループ合同) 全体振り返り、感想の共有、学生成長度評価 授業終了後に実施する新湊きっとくと市場でのアンケートの準備 |

※RESAS(リーサス):地域経済分析システム。地方自治体の様々な取り組みを情報面から支援するために、まち・ひと・しごと創生本部事務局が提供する、産業構造や人口動態、人の流れなどの官民ビッグデータを集約し、可視化するシステム。

プロジェクト実施内容

事前学習

データを活用した観光振興の観点から、まず RESAS を用いて射水市内の観光動態について学びました。(4, 5 回目)

ねらい RESAS を用いることでデータから観光を見るという基本的な考え方を身に付ける。

動機付け

RESAS から見える射水市の観光の問題を射水市役所担当者に対してプレゼンテーションを行い、ここで射水市の抱える問題を改めて学生にインプットしてもらいました。(6 回目)

学生自身が RESAS や射水市役所担当者からの依頼を受けて、このゼミで何をすべきかを考えさせました。(8 回目)

ねらい 学生にデータからの根拠・仮説を基に射水市に提言を行わせる。実際の射水市役所職員から現場の問題を引き出し、自分たちの提言とのギャップも含めて、この授業で何をやるべきかを学生に考えさせる。

地域を知る

射水市の観光地の調査を行わせました。(2, 3, 9, 10, 11 回目)

ねらい そもそも自分たちがあまりに地域を知らないことを理解し、調査させる。

ゴール設定と作業

この授業の成果(射水市へのフィードバック)をどうするかを議論し、結果として「アンケート調査を行い、観光客の射水市内の動態について調査し、射水市に報告すること」としました。(11 回目)

アンケート内容の作成、アンケートを行う場所の調査・調整業務などを行い、その後の授業外でアンケートを実施しました。(12, 15 回目、授業終了後の時間外の 1 回分)

ねらい (教員の助言も含むが) 学生たちが自ら地域からの要望にどう応えるかを考え、その解決策を実施する。

1) 地域からの反応

質問紙法とヒアリングによる観光動態調査を新湊きつときと市場で行い、1日で100件以上のデータを収集しました。その結果をシンポジウムで発表し、また、射水市へ報告を行いました。射水市からは2回目以降のアンケート調査への期待をいただいています。

2) 学生の変化

学生は自ら考え、ゴールを設定し、実施するプロセスを一通り体験することができました。また、意見を出さなければプロジェクト自体が頓挫する環境で、学生自身が切磋琢磨し、意見の少ない学生から聞き出すなど、プロジェクト全体のマネジメントを考えるように成長しました。

加えて、情報システム工学科の学生としては近年注目されている行政データの分析・活用について学ぶことができました。

本プロジェクトから紹介するノウハウ

1) ゴール設定とモチベーションの持たせ方

教員が授業の中で「架空」の課題を練習問題として与えるのではなく、「リアル」な行政の課題を直接担当者から聞くことで、学生のモチベーションを向上させることができます。また今回は行政からの予算措置があったことも関係しますが、学生に対して教員と行政がお互いに本気の仕事として関わっているという姿勢を見せることが重要です。

また、ゴールの設定は、あらかじめ教員が用意したシナリオではなく、なるべく学生を行政や他のプレイヤーと直接交渉させて、実現可能な範囲のゴールを学生自らに設定させます。一方で、教員は行政側の担当者と事前に情報交換を行い、ゴールの落とし所を探しておくことも重要です。教員は地域とのネゴシエーションを行いつつ、学生に考えさせる、決定させる要素を与えることが学生の成長の機会となります。

関係者の打ち合わせ日程なども、学生と行政の間でTAも絡めて自らで設定させて、それを教員が追認するような方法をとりました。これにより、授業を「やらされている」から「自らやっている」という認識を持たせることができたと感じています。

2) ディスカッションの工夫

このプロジェクトでは特別なグループワーク手法やアイデア創発手法は利用しませんでした。その代りに、意識したポイントとしては、できるだけ学生同士で話し合いをする機会を作り、そこに TA も加わって議論をしました。どうしても話が上手な学生とそうではない学生に分かれるため、ディスカッションに積極的に参加できない学生に対しては役割を与えることや、積極的な学生に対して「他の学生の意見も取り入れるように」などのアドバイスを伝えることで、議論の活性化を図りました。



コ ラ ム

情報技術と観光振興という、今ホットなトピックスを取り上げたため、学生の授業への関心は持たせやすかったと思います。

RESAS からのデータだけでは十分でないことを学生自らが気づき、「観光客へのアンケート調査が必要」というゴールを自ら設定できたことは非常に良かったと考えています。射水市の担当者とも事前の協議の中で、「学生達の自由度を重視していること」、「結果も重要であるが学生の教育の場であること」などを理解していただけたことが、学生の活動の幅を広げたことにも寄与していると感じています。

結果として、高いモチベーションの維持につながり、授業の枠を終えた後でも、夏休みの時間を利用してのアンケートの実施、データ解析、シンポジウムでの発表など、積極的に参加してもらえたと思います。

結局、有体な言い方にはなってしまいますが、地域協働授業の実施においてはいかに学生のモチベーションをコントロールするかが大きなウエートを占めているのではないかと授業を通じて改めて認識しました。

2. 本事例における学生成長度評価

①今回設定した評価項目

2章でも学生成長度評価について紹介しましたが、今回は以下4つの評価項目を選び、地域協働授業における学生の授業に対する評価を行いました。 ※授業モデル4つの評価項目は共通

| 選んだ評価項目 | | 設定した評価内容 | A 評価の教員基準 |
|----------------|-------|----------------------------|--------------------------|
| 大項目 | 中項目 | | |
| 地域課題力 | 起案する力 | このゼミにおいて何らかのアイデアを発想できたかどうか | 議題の過半数に対してアイデアを出すことができた |
| 仲間とのコミュニケーション力 | 伝える力 | ディスカッションで議論に参加できたか | 議論の過半数に対して自分の考えを発言できた |
| | 聴く力 | グループワーク等で他人の発言を聴くことができたか | 自分の意見に他人の意見を反映することができた |
| 対外的コミュニケーション力 | 問う力 | 地域の人に自分たちの仮説に基づいた質問ができたか | 質問する機会の過半数で仮説に基づいた質問ができた |

学生成長度評価票と評価項目例一覧表

次頁に、今回利用した学生成長度評価票と評価項目例一覧表を添付しますのでご参考とさせていただきます。

学生成長度評価は学生自身による振り返りを行わせますが、教員や同じグループメンバーからのフィードバックを学生と対面で行うことをお勧めします。今回の授業モデルでは、最終回到4班合同で学生と教員・コーディネーターで対面式のヒアリングを交えながら学生の自己評価と教員からの評価記入を行いました。このプロセスを経ることで、教員側から学生の成長について直接フィードバックを行うことができました。文面だけでは伝えにくい活動や授業への関わり方へのフィードバック、評価については「できなかったこと」よりも「取り組めたこと・成長があったこと」について素直に褒めることが、授業後の地域への活動や学生の次への行動の後押しとなります。

評価項目例一覧については、授業で取り扱う地域課題の内容と授業内で学生に成長して欲しい項目を考慮して、適宜選択・設定していただいて構いません。重要なポイントとしては、授業開始時や途中経過で、評価項目を教員が学生に対して伝えることで、プロジェクトの方向性や授業でのアプローチについて意識を集中させやすくなります。場合によっては、

授業開始時に評価項目を学生と一緒に設定することで、より学生の主体的な授業参加を促進することも可能と考えています。

学生成長度評価票（記入サンプル）

○地域協働科目を対象にした評価票 平成28年度上期

科目名：トピックゼミ 担当教員名：富山先生

学科名：●●学科 学籍番号：12345678 氏名：射水 太郎

①【地域課題力】※中項目は「理解する力」「挑戦する力」「起案する力」から選択

| 中項目 | 評価内容（担当教員が独自に設定） | A評価の教員基準 | | |
|-------|----------------------------|-------------------------|------|-------------------------------------|
| 起案する力 | このゼミにおいて何らかのアイデアを発想できたかどうか | 議論の過半数に対してアイデアを出すことができた | | |
| 評価 | 自己評価 (実施前) | 自己評価 (実施後) | 教員評価 | 教員コメント 自ら提案・行動し、リーダーシップを発揮してくれた。 |
| | C | A | S | |

②【仲間とのコミュニケーション力】※中項目は「伝える力」「聴く力」「問う力」から選択

| 中項目 | 評価内容（担当教員が独自に設定） | A評価の教員基準 | | |
|------|--------------------|-----------------------|------|--------------------------------------|
| 伝える力 | ディスカッションで議論に参加できたか | 議論の過半数に対して自分の考えを発言できた | | |
| 評価 | 自己評価 (実施前) | 自己評価 (実施後) | 教員評価 | 教員コメント わかりやすい言葉を選び、議論の活性化の一役を担った。 |
| | B | S | A | |

②【仲間とのコミュニケーション力】※中項目は「伝える力」「聴く力」「問う力」から選択

| 中項目 | 評価内容（担当教員が独自に設定） | A評価の教員基準 | | |
|-----|--------------------------|------------------------|------|----------------------------------|
| 聴く力 | グループワーク等で他人の発言を聴くことができたか | 自分の意見に他人の意見を反映することができた | | |
| 評価 | 自己評価 (実施前) | 自己評価 (実施後) | 教員評価 | 教員コメント 相手の意見を引き出すことも今後意識して欲しい |
| | C | B | B | |

③【対外的コミュニケーション力】※中項目は「伝える力」「聴く力」「問う力」から選択

| 中項目 | 評価内容（担当教員が独自に設定） | A評価の教員基準 | | |
|-----|--------------------------|--------------------------|------|---|
| 問う力 | 地域の人に自分たちの課題に基づいた質問ができたか | 質問する機会が過半数で課題に基づいた質問ができた | | |
| 評価 | 自己評価 (実施前) | 自己評価 (実施後) | 教員評価 | 教員コメント グループの中では率先して地域の人にアポイントを取り、質問を行った行動は評価に値する |
| | B | A | A | |

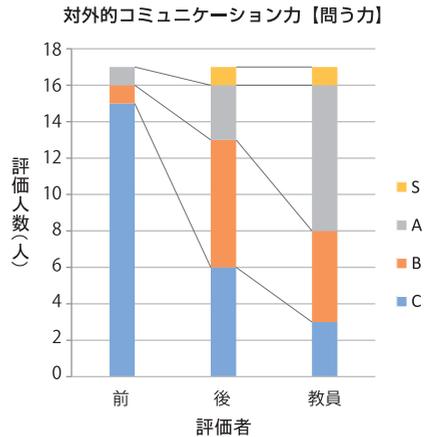
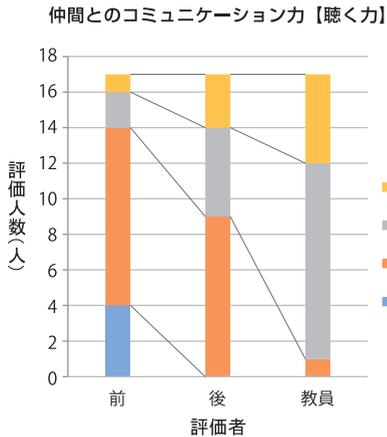
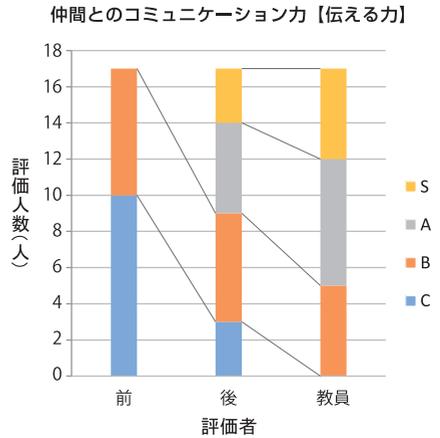
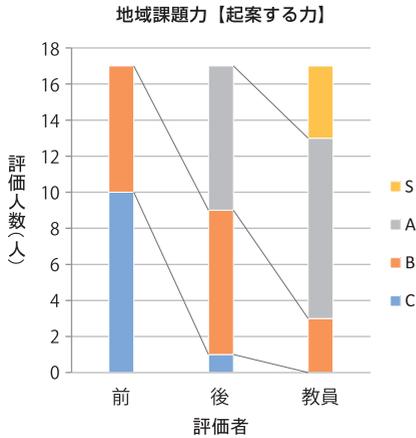
【学生記入欄（実施後）】自己の評価について自由に記述してください。
 今まででは自分から意見を出すことや発言することは少なかったのですが、少人数のグループワークだったため自分から積極的に意見をすることができ、自分の成長を感じることができました。
 特に自分の住んでいる地域でありながら、地域での取り組みや実際に事業を運営をされている方とコミュニケーションを取ることがほとんどなかったのが刺激になりました。また今後自分が関わることがあれば、今後も地域に赴いてみたいと思います。
 今回の地域協働授業については自ら意見を出す・行動していく部分で成長を感じました。

| | |
|--------------------|---|
| ①地域課題力 | 【理解する力】 |
| | 地域の歴史、背景などを理解できるか。 |
| | 地域の問題を理解できるか。 |
| | 地域産業の課題を理解できるか。 |
| | 地域環境の課題を理解できるか。 |
| | 【挑戦する力】 |
| | 解くべき課題を自ら発見できるか。 |
| | 立案した計画にそって正しく行動できるか。 |
| | 解決のために必要な調査(文献、ネット、ヒアリング)ができるか。 |
| | 最終プレゼンへの準備を諦めずに十分できるか。 |
| ②仲間とのコミュニケーション力 | 【起案する力】 |
| | 初期のアイデア出しに積極的に協力できるか。 |
| | インタビュー、フィールドワークの計画ができるか。 |
| | 課題の解決策を考え、提示できるか。 |
| | 授業が求めるゴールが達成できるか。 |
| | 【伝える力】 |
| | 相手を説得して自分の意見を認めてもらえるか。 |
| | 熱意を持って自分の意見を仲間に伝えられるか。 |
| | グループワークで自分の意見を発信できるか。 |
| | 自分の感情をコントロールして授業やディスカッションできるか。 |
| ③対外的コミュニケーション力 | 【聴く力】 |
| | グループワーク等で他のメンバーの意見をきちんと聞くことができるか。 |
| | 教員から授業内容、課題について十分に聞き取る事ができるか。 |
| | グループ毎のテーマ設定や計画を立てる際に、メンバーの意見を聞くことができるか。 |
| | 人の意見を受け入れることができるか。 |
| | 【問う力】 |
| | 疑問に対して質問できるか。 |
| | 授業やグループワークなどで積極的に質問できるか。 |
| | 教員の講義内容を聞いた後、自ら質問できるか。 |
| | 仲間のプレゼンテーションに対して、積極的に質問できるか。 |
| ③対外的コミュニケーション力 | 【伝える力】 |
| | プレゼンテーションソフトを使ってわかりやすい資料が作成できるか。 |
| | 聞き取りやすいスピードで話せるか。 |
| | 効果的な発表ができるか。 |
| | 自分達の意見を報告書にまとめられるか。 |
| | 【聴く力】 |
| | 地域の人々から積極的に話を聞くことができるか。 |
| | 学外での講演会を熱心に聴くことができるか。 |
| | 学外からの講演者等の発表を熱心に聴くことができるか。 |
| | 地域の人々と積極的にコミュニケーションを取ることができるか。 |
| ③対外的コミュニケーション力 | 【問う力】 |
| | 学外からの講演者等に積極的に質問をすることができるか。 |
| | 学外で開催された講演会等で積極的に質問することができるか。 |
| | インタビュー内容を適切に設定できるか。 |
| 相手の立場を理解した質問ができるか。 | |

② 評価結果

今回設定した4つの評価項目について、最終授業後に学生成長度評価を行いました。学生には地域協働授業を実施する前と後での自己評価と、教員による授業後の学生に対する評価について、最終まで授業に出席した学生17名を対象に実施しました。

【学生成長度評価_評価集計表（17名分）】



前：実施前の学生自己評価 後：実施後の学生自己評価 教員：学生自己評価後の教員評価

学生記入欄（抜粋）

<地域課題力>

- 成果発表会での発表が想像以上に高評価だとは自分では思わなかった。少し自信になった。
- 自分の興味のあることはある程度積極的に行動できたが、関心のない事柄に関しては極端に消極的になるときがあり、その点についてはほとんど成長できなかった。
- 今までなら「絶対に逃げていたなあ」と思っていたことから逃げずに頑張ることができたと思う。人と話すことに対する抵抗が少なくなった。

<仲間とのコミュニケーション力>

- これまでの自分より自分の考えを周りに伝えられるようになった。他人とは違う自分の視点で意見を言うことができた。
- プレゼン等の発表する機会がたくさんあったことが良かった。今回の授業では特にその点で成長できた。
- 他人に依頼する時はグループ LINE ではなく個別に頼むことが大事だと学んだ。他人の意見を引き出すためには、どのように質問すれば意見を出しやすいかが分かった。他人に意見を伝えるカタチを学んだ。
- 思いついたアイデアをバンバン言えるようになった。
- 相手の考えを汲み取って話をすることを今回のゼミでとても訓練することができた。全体的にコミュニケーション力が向上した気がする。

<対外的コミュニケーション力>

- 授業を通じて、全然知らない人と話していても分らない事はすぐに聞けるようになった。まだ頭の整理が上手くできず、わかりやすく伝えることについては十分ではないが、自分で発言することは増えた。
- 振り返りの際に自分の良い点についてアドバイスをいただいたが、自分では気づいていない点多かった。
- 自分の意見を最初はなかなか言うことができなかったが、授業の後半からは自分の考えていることを伝えることができるようになった。
- アンケートのとり方がとても勉強になった。

③評価結果からの考察

- 学生自己評価において、実施前に比べて実施後の方が概ね評価が高くなっていることから、成長を実感している学生は多いと感じています。
- 評価項目別に見ると、対外的コミュニケーション力【問う力】においては、ほとんどの学生が実施前の評価を C としています。実施後の C 評価の数も他の評価項目に比べると多いので、対外的コミュニケーション力に苦手意識を持つ学生が多かったものと考えられます。
- 教員評価は学生の自己評価よりも、今後への期待も込めた教育的配慮として概ね高めに評価しています。

学生記入欄を見ると、コミュニケーション力の成長について触れているのが多く見受けられます。コミュニケーションの力を養う場の例としてはグループワークや地域の協働先との対話の場などで挙げられます。成長につなげるためには、コミュニケーションの機会を多く学生に与えることが大切です。また、「仲間や教員から指摘されて初めて自分の良いところがついた」とのコメントから、仲間同士で意見や思いを共有することや、教員からの積極的なコミュニケーションも重要だと思われます。



最終授業でのフィードバックの様子

4章 Toolbox とTA活用のすすめ

1. Toolbox (テンプレート、Tips)

Toolboxとは工具箱という意味ですが、ここでは地域協働授業における授業運営やアクティブラーニングで活用しやすいワークシートとその使い方を紹介します。

本マニュアルを手にする教員の方々の授業運営に応じて、必要に応じてご活用ください。

今回紹介する地域協働授業の Tool 一覧



教員の
マインドセット



地域協働授業分類
チェックシート



ファシリテーターの
心構え



アイスブレイク集



自己紹介の方法



プロジェクト
運営方法

地域協働授業が通常の授業よりも学生側に主体的な授業参加が求められるように、教員自身も授業に望むマインドセットを切り替えることが必要です。特に地域協働授業では学生・地域に対して多くの負担を強いる場合があります。以下のマインドセットを授業開始前に確認することで、気持ちの切り替えをしやすくなりますし、学生に共有することで教員も同じプロジェクトメンバーとして関わることを意識させることに役立ちます。

内容はあくまでの例ですので、自分に合ったマインドセットシートもぜひ作成してみてください。

SAMPLE

記入日： / /

氏 名： _____

以下、地域協働授業で取り組む上で必要な心構えができていくかチェックしてください。

- 1. 「教員」という肩書に捉われず、協働という立場で自ら学ぶ姿勢を意識する
- 2. 授業ではあるが、その時間は地域の方々の生活・生産活動時間でもあるため、協力いただく感謝と尊敬の念を持って地域の人々と接する
- 3. 座学の知識よりも、現地での調査・地域とのコミュニケーションから得た経験を重視する
- 4. 学生の主体性を尊重する、学生からの意見に耳を傾ける
- 5. 地域の課題に向き合うことで、自身および大学の専門性を活かせる部分はないのか常に探す
- 6. 手法にとらわれず、授業に関わる人の特性を活かす
- 7. やりっぱなしにならず、各授業での振り返りを行う
- 8. 一人で考え込まずに、COC コーディネーターや経験のある教員に相談する
- 9. 効率化を考える前に、現状でやれることに素早く取り掛かる
- 10. 自身も地域住民での立場を忘れず、シビックプライドを持ち、地域・住民に必要とされる授業を行うことを忘れない

上記 10 個のマインドセットを忘れずに、地域協働授業に臨んでください。

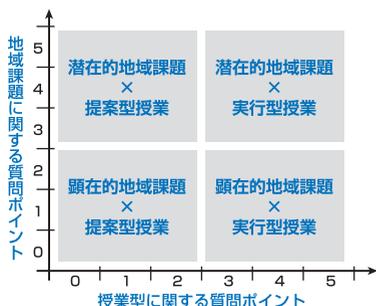
自らイメージする地域協働授業を 3 章で紹介した授業モデルのどれに当てはまるのか確認したい場合は、以下のチェックシートの質問に答えることで整理しやすくなります。教員自身の地域協働授業に対する関心やリソースのポジショニングを整理することで、授業モデルで紹介したポイントや授業から得られる効果を参照して、自身が目指す地域協働授業とイメージがマッチしているかについてご確認ください。

教員で自身が学生と地域協働授業を行う上で取り組んでみたい内容について整理します。

以下の質問にお答えください。

【地域協働授業で取り組みたい内容に関する質問】

| No | 分類 | 質問 | はい | いいえ | 備考 |
|--------|------|--|----|-----|----|
| 1 | 地域課題 | 課題は地域から提示されるものよりも、掘り起こしの段階から学生に携わってほしい | | | |
| 2 | | 授業で協力を得る地域の方の真の課題について学生が主体となり考えてほしい | | | |
| 3 | | 地域の人からの情報以外にも、統計情報や独自のアンケートなどで地域課題を多面的に取り組ませたい | | | |
| 4 | | 学生が授業の時間以外でも地域に関わる自主的な取り組みになり、地域に足を運ぶ契機としたい | | | |
| 5 | | 地域のキープレイヤーと既にコミュニケーションはとれている | | | |
| 地域課題合計 | | | | | |
| 6 | 授業型 | 学内よりも現地での授業を多く行いたい | | | |
| 7 | | 調査・提案だけでなく、企画から何か実際にカタチに残るものにアウトプットさせたい | | | |
| 8 | | 専門的な教育（プログラミング等）を活用した講義を授業に組み込みたい | | | |
| 9 | | 自分自身の研究領域と地域で活用できる接点がすでに見つけられている | | | |
| 10 | | 通常の授業以外の時間に授業をスライドして、教員を含め休日に活動できる時間を作ることができる | | | |
| 授業型合計 | | | | | |



はい … 1 ポイント いいえ … 0 ポイント

地域課題の合計：3 ポイント以上の場合、潜在的な地域課題に分類

2 ポイント以下の場合、顕在的な地域課題に分類

授業型の合計：3 ポイント以上の場合、実行型授業に分類

2 ポイント以下の場合、提案型授業に分類

Toolbox その3 地域協働授業を運営する上での心構え

授業を運営する上で重要なことは、事前に授業内容を設計することと、当日の学生が授業で主体的に活動できる環境を整えることです。全体の設計（コーディネート）と会議運営（ファシリテーション）の基本的な心構えについてポイントをおさらいしましょう。

■ 授業全体を設計する（コーディネート）

以下の項目が授業で明確になっているか事前に確認しましょう。

1. どんな目的で実施するのか？（Goal）

→ 課題を見つけたいのか？

アイデア出しをしたいのか？

ゴールに向けた合意形成をしたいのか？

2. 誰に声をかけるのか？

→ 必要に応じて個別に声掛けをしましょう。（地域の関係者、TA、COC コーディネーターなど）

3. 終了時にどんな状態になりたいのか？

→ 授業に参加した学生・地域の人が終了時にどんな顔で帰ってほしいのか想像してみましょう。

■ 場を運営する（ファシリテーションの心掛け）

当日の授業運営では、以下を心がけて授業の進行・サポートを行きましょう。

1. 参加者と目的を共有する（目指すところを確認）
2. 一人ひとりの参加に対する準備を整える（一人ひとりの心のスイッチを入れる）
3. 会場全体での約束事を決める（安心して話ができる環境を作る）
4. 本題について協議する（大いに語る）
5. 次にやるべきことを確認する（次の場に向けての準備を行う）

- 一人ひとりから場に対するフィードバックを得る（場を閉じるための準備をする）
- 終了し、議事録を共有する（共に過ごした時間の成果物を共有する）

■ 場を進行する（ファシリテーションのテクニック）

授業の進行を行いやすくする方法を紹介します。

1) 紙に書いて、「場におく」

→目的の共有／約束事を共有するための大事な内容は、参加者全員が見える場所に紙に書いて貼り出しましょう。

2) 授業前後のチェックイン／チェックアウト

授業に入る前には準備体操としてのチェックイン、授業後には気持ちの整理運動としてチェックアウトを行いましょう。一人一言、約1分間以内で以下の内容に対するコメントをすることで、授業に対する気持ちを高めます。

例) チェックイン：「名前もしくは呼ばれたいニックネーム」

「普段取り組んでいること・趣味・関心」

「最近あった少し嬉しかったこと」「今日チャレンジしたいこと」

チェックアウト：「率直な今の気持ち」「今日の気付き」

3) ブレインストーミング（強制拡散法）

→自由なアイデア出しを行う上で、以下4つのルールを参加者に約束しましょう。

「相手の意見を尊重する（頭から否定しない）」

「アイデアは質より量が大事」

「他人の意見に便乗してもOK」

「この場では縛られず無責任な意見も歓迎する」

アイデア出しは口頭だけで行うのではなく、紙に書く（ポストイット）やイラストや図で表現する、ファシリテーターが板書するなど、可能な限り視覚化しましょう。

4) KJ法（グルーピング）

上記3) で出たアイデアをわかりやすく分類する際には、近いアイデア同士をまとめていきましょう。

紙（ポストイット）などは近いアイデアを固める、板書の場合はアイデアを線で繋げる・丸で囲むなどを行うことで発散したアイデアを整理します。全体のアイデアの整理には、マインドマップ**等でキーワードの関係性を整理することも有効です。

**マインドマップ：放射状に連想するイメージを言葉や絵で描き、自分の考えを整理する表現方法。

5) 議論の参加者数は少→多に

議論を進める際には、1人(個人ワーク)→2人(ペアワーク)→3~4人(グループワーク)と進めていきましょう。少ない人数から始めることで出席者が発言しやすく、発言できる機会も多く、意見も広がりやすいです。

6) 記録・板書のコツはとにかく書く(リアルタイム議事録)

授業の進行状況・グループでの議論の推移や経緯はファシリテーターもしくは記録者を決めてメモを取りましょう。授業の途中でのこれまでの振り返りにも使えますし、カメラを活用することで授業終了時の簡易的な議事録として参加者に共有することができます。

アイスブレイクとは、緊張をときほぐすエクササイズです。参加者の不安や緊張を氷にたとえ、「硬い氷を壊す」という意味合いでアイスブレイクと呼ばれています。アイスブレイクを行うことで、参加者にリラックスしてもらい、何を言ってもいいという開放的で安心な雰囲気作りと、共同作業に入る前の連帯意識を持ってもらいやすくなります。「アイスブレイク」は、出席者とのゆるやかな関係作りと授業への心の準備を行う場面で効果的です。

地域協働授業では、主に授業でのグループワークが伴う活動の導入シーンで自己紹介と併せて行う場合が多いです。

以下、準備の必要が特になく、手軽に行えるアイスブレイクを紹介します。

■ ペアで自己紹介

利用シチュエーション例：初回の授業や初対面の人との1対1のコミュニケーション（時間：5分～10分間程度、人数：2名以上なら何名でもOK）

やり方：2人1組を作り、それぞれ1分間ずつ自己紹介を行います。以下のような項目をある程度話の内容指定することで自己紹介を行いやすくします。時間に合わせて、ペアを交代しながら自己紹介を続けます。

◆ 自己紹介項目

1. この場（授業）で呼ばれたい名前・ニックネーム
2. 普段取り組んでいること（ゼミ/部活/サークル/興味/関心/アルバイトなど）
3. 今日期待していること
4. Good&New（24時間以内にちょっと嬉しかった・新しい発見を話す）



■じゃんけんゲーム

利用シチュエーション例：大勢が集まる説明会やミーティングの際に有効。1対複数人のコミュニケーション（時間：5分～10分間程度、人数：何名でもOK）

やり方：ファシリテーターと以下のルールで、10～20回ほどじゃんけんを行います。以下の順番に従い、難易度を上げていきます。

手だけでなく、じゃんけんぼんの声に合わせて学生や出席者もファシリテーターの声に合わせて「ポン」と大きな声で発声することで、声を出す準備運動になります。

- 1.（初級編）ファシリテーターと引き分け（あいこ）になる
- 2.（中級編）ファシリテーターに勝つ
- 3.（上級編）ファシリテーターに負ける



■ノンバーバル・コミュニケーション

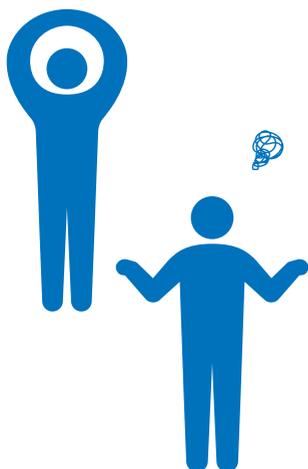
利用シチュエーション例：言葉以外のコミュニケーションを通じてプロジェクトメンバーの仲を深める場合など。

（時間：10～15分間程度、人数：10～20名程度）

やり方：言葉を使わずに、グループワークで何かの目的を達成させます。

◆テーマ例

- 言葉を使わずに、生年月日順に整列する、血液型などでグループを作る。
- 言葉を使わずに、ジェスチャーや画などで伝言ゲームを行う。



■ キャッチ

利用シチュエーション例:集中力を高めたい時。(時間: 5～10分間程度、人数: 4～20名程度)

やり方:参加者で円を作るように並び、左手の人差し指を左側の人の胸の前に下向きに差し出します。右手は自分の身体の前で掌を開いて構え、右隣の人の差し出された左手人差し指をいつでも掴まえるように準備します。ファシリテーターが「キャッチ!」と合図を出すとともに左指は掴まれないように上に逃げ、右手は隣の人の左人差し指を掴めるように閉じます。また、合図についてはフェイント(「キャッチ」以外の言葉を言う)を入れることでゲーム要素が高まり、ゲーム参加者の集中力が高まります。このゲームを右と左を交代する、また「キャッチ」の合図をメンバーが自由に号令をかけるなど徐々にルールを追加しながら繰り返していきます。



地域協働授業を運営するにあたって学生への指導や地域とのコミュニケーションを取る際に有効なツールを紹介します。

■ コミュニケーション

自己紹介（エレベーターピッチ）

学生・地域の人を問わず、初めて出会う人・忙しい相手に対する自己紹介は避けては通れないコミュニケーションの機会の一つです。今回は、地域協働授業において自身の考えの整理にも活用できる自己紹介方法を紹介します。

エレベーターピッチとは米国・シリコンバレー発祥の起業家が行うプレゼンテーション方法として有名です。30秒・約250文字で相手に自社やサービス、自分自身のことを相手に説明する方法です。特徴としては結論から説明することで、ダラダラとした説明ではなくなり、簡潔な報告・説明ができるようになります。

エレベーターピッチ記入シート（地域の人に自己紹介をする場合）

| No | 発言する内容 | あなたの自己紹介 |
|----|---------------------------|-----------------------------------|
| 1 | 氏名（もしくは呼んでほしいニックネーム） | 射水 太郎 |
| 2 | 自分が今回の授業で取り組みたいこと（もしくは関心） | ●●地域で若い世代の観光客に関心を持ってもらうためのPRをやりたい |
| 3 | 相手の困っていることに対する自分の仮説 | ●●地域で若い世代の観光客はあまり見かけない |
| 4 | 自分（たち）はどんなことができるのか | 若者・よそ者目線でアイデアを出せる |
| 5 | 今回相手に協力してほしいことは何か？ | ●●地域の若い世代の観光客に対する観光の取り組みを教えてください |

■ プロジェクト運営の方法

カンバン

トヨタ自動車が生み出したジャストインタイムの生産の指示票としても活用される作業管理状況の見える化ツール。作業タスクの状況をボード上の位置で明示することで、これから取り組まないといけないこと（TODO）、現在取り組んでいること（DOING）、既に

完了していること（DONE）の情報共有が行いやすいです。地域協働授業でも簡潔に素早くプロジェクトの進捗管理を行いたい時や授業の開始時など、これまでの各作業状況の確認を行う際に活用ください。

カンパシ 例)フィールドワークに向けた授業進捗確認

| TODO | DOING | DONE |
|------------------------------|----------------|----------|
| ・当日の調査目的や関係者への質問内容の検討 | フィールドワークの計画作り | 授業の課題の設定 |
| フィールドワーク時の関係者向けのプロジェクト紹介資料作成 | 関係者へのアプ取り | 事前の地域調査 |
| | 現地入りまでの交通手段の確認 | |

フィールドワークふりかえりシート

地域協働授業では授業の対象になる地域にフィールドワーク等で多く足を運びますが、移動が伴う場合には、なかなか現地で得た体験や気づきを整理する時間がありません。フィールドワークふりかえりシートでは、フィールドワークの目的の確認、目的に対して今回得られたこと、フィールドワークの中で当初の目的以外にも感じた有益な情報・体験、同じグループのメンバーと議論をして得られたコメントや印象に残った意見について整理して書き留めることで、次回以降の授業にフィールドワークで得た知見を活かしやすくなります。

フィールドワークふりかえりシート

例) 道の駅●●の施設見学

日時： _____

場所： _____

氏名： _____

今回の目的

・道の駅での地域住民・観光客の利用の実態を把握する

今回得たこと

・観光客だけでなく、地域住民の利用が想像以上に多かった。（特に午前中）

・観光客は人気商品の購入に集中する傾向があることがわかった。

今回感じたこと

・地域の野菜や焼きたてのパンなど地元の人でも買いやすい商品が意外と多いと感じた。

他の人から得たフィードバックと共感

・この地域を体験できるコーナーや若い人がリラックス休憩できる場所が欲しいという意見があり、そのようなスポットがあると市外の友人とも行きやすくなると感じた。

プロジェクトふりかえりシート

15回の地域協働授業では中盤の折り返しとなる7, 8回目になるとプロジェクトの振り返りが必要になります。回を重ねるに連れて、当初課題設定した目的を変更する、プロジェクトの進行が遅れることなど、ステークホルダーや外部要因が通常の授業に比べて多い地域協働授業ではよくあることです。可能であれば、自分のグループだけでなく、他の教員グループと合同で中間のプロジェクト報告会を行いましょう。共通で悩んでいる課題や今後取り組む予定の課題について他のグループが既に取り組んでいることなどを共有できる機会となります。

プロジェクトふりかえりシートは、主に授業計画の中間やマイルストーンとなる授業が終了した際の振り返りで利用することを想定しています。現状での「チームの目指すゴール」、「現状のプロジェクトの進捗」、「今、困っていること」などを整理して、3～5分間程度発表することで今後の授業運営に関する改善点や方向性について見つめ直してみましょ。全体の授業終了時にも、個別の学生成長度評価と合わせて、グループ全体で同様の項目を振り返ることで、「授業後も行いたいこと」や「他に協力が必要なこと」が明確になり、授業後の学生のモチベーション向上にもつながります。

| プロジェクト ふりかえりシート | |
|-----------------|--|
| 1. チームの目指すゴール | 若い世代の観光客向けの着地型体験コースを1つ地域の人と完成させる。 |
| 2. 現状のプロジェクトの進捗 | 地域の関係者と現地に観光に来ていた若い観光客へのインタビューを行った。 これから若者向けの見どころを選択し、具体的なコース作りを行う。 |
| 3. 今、困っていること | ex) アイデア、地域の人、チーム運営、地域の人とのコミュニケーション、スキル など ・ 地域外へのPRする方法やクチコミを増やす方法 ・ 地域の人がなかなかプロジェクトに共感してくれない ・ わかりやすいチラシを作りたいが、デザインについて相談できる人に出会いたい |

2. TA活用のすすめ

COCTA からの TA 活用のすすめ

COCTA としてこの地域協働授業マニュアル作成に関わり、また COCOS のメンバーという立場から感じたことや授業サポートを通じてメンバーから出た意見などを書きます。

まずはじめに、私達 COCOS は、COCTA として地域協働授業を行うゼミでの TA を毎年行っています。まだまだ現状として、COCTA という制度を知らない・理解されていない先生方が多いと感じています。その原因は、COCOSメンバーが地域協働授業の全てに配置できていない、周知が足りていない、COCTA が欲しい時にどこに申請すればいいのかわからない、などの色々な理由があると考えています。本マニュアルを通して COCTA を少しでも理解していただき、活用していただきたいと思っております。

COCTA として行っていることを以下に挙げます。

- 授業の備品の準備（模造紙や付箋など）
- 授業中のグループワークにおけるファシリテーション
- フィールドワークへの引率
- 授業の進め方など先生方とのミーティング
- 学生の発表資料やプレゼンの手直し
- 協働先の方々とのコミュニケーション

など様々なことを普段の活動を活かして行っています。

COCOS メンバーは4年の場合には3年次か2年次、3年の場合には2年次の授業に TA として参加しています。まだ経験の浅い3年生のメンバーは必ずしも上記の仕事全てをこなせるとは限らないですが、どのメンバーも普通の学生生活を送ってはいられない経験を COCOS の活動で得ていますので、何かしらのカタチで先生方の力になれると考えています。特に、地域の方々と話し合いや、行政の職員の方々と協働して行っていく授業、もしくは外部の人に対してプレゼンテーションの機会があるゼミでは私たちの力が存分に発揮できると考えています。

どこからどこまでを COCTA に授業を任せるかということは先生方との相談次第ですが、より良い地域協働授業にしたいという気持ちは十分持ち合わせておりますので、

是非私達 COCOS メンバーを COCTA として活用していただけたら嬉しいです。よろしくお願いいたします。



COCTA による授業運営のサポートの様子

教員からの TA 活用のすすめ

TA は基本的には COCTA が存在しており、地域協働授業の細かな部分を補佐してくれています。ホワイトボードや付箋の用意など、雑事一般を引き受けてくれるのみならず、特にアクティブラーニングの経験があるTAも多く、「最後の学生の意見集約は〇〇方式で行ったら良いのではないのでしょうか？」等の的を射たアドバイスも貰えることが多く、アクティブラーニングを始めた当初はかなりの意見をもらいながら授業を進めたことがあります。現在においても、一歩引いた視点からアクティブラーニングについての意見を貰える効果は大きく、重要なアドバイザーとして重宝しています。

また、上記以外にとっても助かると感じているのは講義録をお願いできることです。教員の教育技術向上のために、記録を取ることの重要性は言うまでもありませんが、これらの講義録も授業の狙いや教育手法についての理解が十分でないと有用な記録は行えません。この点においても、有益な講義録を作成してくれます。本マニュアルの文章や写真も彼らの講義録からの引用が多いです。教員は授業を行っている最中は、毎週の運営に気を取られ、なかなか記録を残す余裕がありません。15 週分の授業が終わってほっと一息ついた時には、すでに前半の授業の記憶は曖昧となっていることはありませんか。

また、3 章で紹介した先述の呉羽山班で実施したプログラミング教育の授業は COCTA の専門領域外になるため、技術 TA を別途雇用しています。時間内にプロジェクトを達成するために技術を教えることは重要な任務ではありますが、TA が学生を押しつけて動いてはいけません。

どちらの TA も技術を知ってるだけでは務まらず、プログラミングツールの選定や教育、打ち合わせは非常に重要であり、運営を経験した TA は大きく成長し、本学のいろいろな試みを助けてくれる貴重な人材となると考えています。現状の問題点としては、COCTA は地域協働授業の予算でアルバイト代を負担してくれていますが、技術 TA は教員自身がアルバイト代を賄う必要があり、TA の人数、時間によってはかなりまとまった額が必要になります。地域協働授業関連研究費を取得することや、その他の教育予算の活用や充実が望まれます。



技術 TA による指導の様子

編集後記

本マニュアルでは、マニュアル作成を念頭に置きながら、実際に授業設計や地域協働授業の運営を通じて生まれた事例をまとめました。また、教員の方々の授業設計や運営を助けることを目的に Toolbox も掲載しました。

今後も地域協働授業に取り組む教員のみなさまの一助となれば幸いです。もし本マニュアルについてのお気づきの点やご不明点がございましたら、ぜひご連絡をいただければと思います。

地域協働授業は学生や地域の方の個性や能力、また教員の方の専門性などによっても大きく運営やアウトプットが異なっていく授業です。

本マニュアルも時代と共に新しい経験や方法論も取り入れ、定期的に更新していくものだと考えております。今後は教員のみなさんご関心のある方は是非一緒にマニュアル作りにご参加または資料提供していただけると幸いです。

最後に、本学が目指す「地域協働型大学」へと発展していくには、授業後の継続性も重要となってきますので、その点についても触れたいと思います。

1) 地域協働授業後の学生のモチベーション維持とフォローアップ

地域協働授業での学生の取り組みが深まれば深まるほど、授業期間内でプロジェクトが完結しにくい状況に陥ることも事実です。地域協働授業を通じて生まれた地域とのつながりの中で、地域からの更なる依頼や要望が生じてくることもあります。授業の枠を超えて、継続的な取り組みが必要となった場合には、次のような工夫で継続性を持たせることが挙げられます。

- 学生のモチベーションを維持しながら「学生自主プロジェクト」につなげていく。
- 同様の取り組みをしている教員及び学生でグループを作って、グループ内で協力・役割分担しながら継続性を持たせる。(現在 COC 課題グループで取り組み中です。)
- 同様の取り組みを学期や年度で繰り返す場合には、既に経験した OB・OG の学生に協力してもらい、取り組みを発展させていく。
- 学生の卒業研究、教員の研究テーマにつなげる。

2) 継続した地域とのつながり作り

地域協働授業は地域の人々との良好な関係があつてはじめて、学生や教員が地域の課題に触れることができます。最初の地域との関係作りはなかなか大変かもしれませんが、地域に何度も足を運ぶことや自分たちが考えていることを誠実に伝えることによって、相手の心を動かすことは可能です。

ぜひ忘れないでいただきたいこととしては、地域協働授業が終了した後も地域と大学とのつながりは残っていくことです。授業後の学生自主プロジェクトだけでなく、特に他の授業でこれまでと異なる教員や学生がその地域に関わる場合には以下のような情報を前任の教員から引き継ぐことが地域との良好なつながりを維持していく点において重要です。

- これまでに地域と大学でどのような活動を行ってきたのか
- 地域から相談を受けている課題と大学に求めていることは何か
- 地域のキーマンやコミュニケーションで気をつけるポイントは何か など

地域とのネットワークづくりについては地域協働支援室が事務局として行っていますが、地域のつながりは地域行事やご近所付き合いからも生まれることがあります。ぜひ些細なことでも構いませんので、地域の方々から何かお伺いしたことや気になることがございましたらご連絡ください。



※参考：4章ToolboxとTA活用のすすめ「Toolboxその3 地域協働授業を運営する上での心構え」(49頁～51頁)、「Toolboxその4 アイスブレイク」(52頁～54頁)の記載については、「第10回全国スポーツクラブ会議レガシープログラム クラブ未来創造塾「地域課題解決に向けた事業のつくりかた」(2016年9月18日開催 主催:いしかわクラブズーン)配布資料 一般社団法人鹿兒島天文館総合研究所 Ten-Lab「ファシリテーション講座(永山由高編)」を参考にしています。一般社団法人鹿兒島天文館総合研究所 Ten-Labより許可を得ております。

地域協働授業の教員向け運営マニュアル

平成 29 年 2 月 発行

【発行・編集】公立大学法人富山県立大学 COC 課題別グループ「地域の魅力向上」マニュアル作成チーム

富山県立大学情報システム工学科 中田 崇行 准教授

富山県立大学情報システム工学科 岩本 健嗣 准教授

富山県立大学COCコーディネーター 堺 勇人

まとめる専門家 代表 松本 八治

【構成】ヤマシナ印刷株式会社

【お問合せ】富山県立大学 地域協働支援室

TEL : 0766-56-7500 (内線 255)

FAX : 0766-56-8022

メール : coc1@pu-toyama.ac.jp

このマニュアルの内容に関して、活用の相談等ありましたら上記までお問い合わせ下さい。

